

集団参加とライフ・スタイル

——青少年のグループ・サークル活動調査から——

柴 野 昌 山

Group Participation and Life Style

——From the social survey of group and circle activities
among young people——

SHIBANO Shōzan

1

ある種の集団参加が、パーソナリティの発展と成長を促進するものであるということは一般に認められている。筆者は1974年に発表した論文において、グループ、サークルなどの小集団への参加と自己概念の変化との関係を考察し、集団参加者は、非参加者よりも望ましい自己概念を形成する傾向がある、集団への参加期間が長くなるほどこの傾向は促進される、また集団活動を積極的に行っているものほど自己確信や自己実現の度合いが大きい、などの点を指摘した¹⁾。これらの傾向は、一般にグループやサークルと呼ばれるところの仲間づくり、奉仕活動、または人間形成を目標とした任意の小集団において特徴的にみられる。

従来、戦後のサークル活動の高まりのなかで生まれた神話として「サークルは善である」という考え方がひろく一般社会のなかに定着し、どんな形であれ、とにかくサークル活動をやれば自動的によい結果をもたらすものだと思われてきた。先の研究は、この神話を疑うことから出発したが、結論としてはその神話にある側面から肯定することになった。たしかに小集団活動は、それが許容的な雰囲気を持ち、メンバーにとって準拠枠として機能しているときには、望ましい人格成長²⁾をもたらすといえるのである。マス化が進行する社会のなかで、自己疎外の克服をめざす小集団の役割や仮面をかぶった自己を放擲して真実の自己を発見する成長グループの効果などがある程度の確信をもって語られる³⁾のも、このような対面的で即自的な集団過程がある程度の積極的な機能をもっているからである。

だが今回、われわれが行った一連の調査研究には、従来の小集団活動に対する楽観的な見方を修正しなければならないようなデータが含まれていた。もちろん全体としては望ましい傾向が支配的であったが、いわゆる産業化の行きづまりを反映したあらゆる場面での活動の低調さと関連しているのであろうか、ともかく小集団活動の停滞がめだつのは、単に時代の流れとして見過すことのできない小集団活動のもう一つの側面を露呈しているように思われるのである。

2

調査 A, B⁴⁾ において、表1のような5つの質問項目から集団参加に対する一般的な態度ま

柴野：集団参加とライフ・スタイル

表1 集団参加に対する一般的態度

(問) いろいろなグループ・サークルや団体がありますが、あなたは参加するとすればつぎのイ、ロ(－, ＋)のうち、どちらを望みますか。

質 問 項 目			調 査 A	調 査 B
1	－	気の向いた時に気楽に参加できる方がよい	214 (71.3)	545 (65.7)
	＋	少々きゅうくつでも出席や活動が義務づけられている方がよい	82 (27.3)	243 (29.3)
2	－	一時的に集って、その時その時に何かやる	54 (18.0)	147 (17.7)
	＋	長つづきのする活動、継続して何かやる	242 (80.7)	637 (76.8)
3	－	目的よりも、とにかく集ることが大切	62 (20.7)	185 (22.3)
	＋	活動目標がはっきりしていることが大切	235 (78.3)	594 (71.6)
4	－	リーダーはとくに必要ない	50 (16.7)	151 (18.2)
	＋	経験のあるリーダーが必要	245 (81.7)	632 (76.1)
5	－	必要に応じて役割をきめればよい	142 (47.3)	451 (54.3)
	＋	メンバーそれぞれの役割がはっきりきまっている	154 (51.3)	327 (39.4)

たは構えを尋ねた。それぞれの項目は、互いに相反する2つの選択肢からつくられている。全体的傾向としては、「気の向いたときに気楽に参加できる方がよい」とするものが多く、「少々きゅうくつでも出席や活動が義務づけられている方がよい」という集団規律遵奉型は約3分の1弱である。またメンバーの役割がはっきり決められているよりも必要に応じてそのつど決めればよいというものが多く、役割を固定化したり、集団内にハイアラーキーをつくる傾向に対しては抵抗を示し、役割分担を流動的に考える傾向がみられる。

その反面、活動は長つづきするものが好まれ、活動目標もはっきりしていて、経験のあるリーダーが求められている。だがこのような集団活動が展開されるためには、少々きゅうくつでも出席が規則的に行われ、メンバーそれぞれの役割も明確に決められている必要がある。したがって、項目1、5の反応と項目2、3、4の反応とは矛盾し合うのであるが、このようなところに案外今日の青少年の本音が正直にあらわれているようにも思われる。つまり、自分自身としてはグループに拘束されず、自由で気楽な参加をのぞんでいるにもかかわらず、そのグループ自体は有能なリーダーによって支えられ、永続的かつ活発に活動することを期待しているのである。言いかえれば、今日の青少年は、集団活動において主導的な役割をとることを回避する傾向があり、むしろ集団に依存する方を選ぶといえるのではないか。

だがこの集団依存的傾向は、グループ・サークルへの参加者と非参加者との間では違いがあり、表2が示すようにすべての項目について両者の間に有意差がみられた。つまり因果関係はともかくとして、集団参加は、次のような事象と関連があることが分る。それは(1)サロンの集りや気のおけない仲間つき合い以上の何らかの規律をもった集団に同調する傾向、(2)活動目標が明確であって、継続的な活動を行うことへの要求、(3)リーダーの役割と存在意義に対する承認、(4)集団内の役割分化とメンバーによる役割分担の必要性の自覚などである。

項目4は、とくに議論のあるところであろう。というのもサークルによってはリーダー無用論を実践し、「みんながリーダーである」という考えのもとづいて運営しているところがあるから

京 都 大 学 教 育 学 部 紀 要 XXVI

表2 集団参加に対する一般的態度と参加・不参加との関連
(各項目の+反応のみ表示する, d.f.=1)

項目	参 加	不 参 加	χ^2 の 値	有 意 差
1	179 (36.9)	64 (21.2)	21.5355	$Pr.<0.01$
2	426 (88.2)	210 (70.0)	40.1919	〃
3	394 (81.9)	199 (67.0)	22.5200	〃
4	417 (86.7)	214 (71.1)	28.9102	〃
5	224 (46.8)	102 (34.2)	118.5468	〃

である。これはもっともサークル的なサークルであり、メンバーのサークルに対する自我包絡の度合いも決して低いとはいえない。だがこのようなサークルは、それなりにメンバーに対する役割分担や活動への参加義務が強調されるから、メンバーの心理的負担は大きくなり、集団運営は技術的にも難しくなる。全体的反応として項目4で+反応が多くなっているのもこのような理由によるものと思われる。つまり本来のグループ・サークルの性質からすればマイナス反応（消極的参加）は許容されるはずのものであるが、実際にはこれでは集団運営を効率的にし、目標達成にかかわる生産性を高めることは困難なのである。

リーダー経験の有無と集団参加態度との関連をみると表3のように、項目1、4において差異がある。すなわちリーダー経験のあるものほど拘束的、義務的な集団参加を選択し、リーダー無用論を唱える傾向があるが、これは先に述べたように、集団運営の難しさを体験した結果、一部のリーダーに集団活動の責任をかぶせることなく、全員で責任と役割の分担すべきだという考え方を示すものと思われる。この点に関して、一般のメンバーとリーダーの間には意見の相違があるようである。つまり全体としては、一部のリーダーに負担が集中してもそれほど気にとめることなく、リーダーに依存している方が楽だという考えが支配的であるように思われる。

リーダー経験の長さ、グループ結成後の年数と集団参加態度との関連は表4のとおりである。

表3 リーダー経験の有無と集団参加態度 (d.f.=1)

項目	経験あり	経験なし	χ^2 の 値	有 意 差
1	82 (55.0)	210 (65.6)	4.8535	$Pr.<0.02$
	67 (45.0)	110 (34.4)		
4	22 (14.9)	38 (12.0)	7.4335	$Pr.<0.01$
	126 (85.1)	279 (90.9)		

表4 リーダー経験・グループ存続と集団参加態度 (+反応のみ, d.f.=1)

	項目	短 い	長 い	χ^2 の 値	有 意 差
(1) リーダー経験の期間	1	15 (40.5)	28 (70.0)	6.7647	$Pr.<0.01$
	5	21 (58.3)	56 (65.0)	0.9178	$Pr.=0.50\sim0.30$
(2) グループの存続期間	1	14 (32.6)	122 (50.6)	4.7713	$Pr.<0.05$
	5	24 (55.8)	148 (61.7)	0.5239	$Pr.=0.50\sim0.20$

(注) リーダー経験期間→短い (1年未満), 長い (2年以上)
グループ存続期間→短い (2年以内), 長い (5年以上)

また集団参加態度と性別、年令、職種、学歴との関連は表5に示されているが（ただし項目1, 5のみ）、これによると女性よりも男性に、就職しているものよりも学生に、高校や大卒者よりも中学卒業者に、また年長青年よりも20才以下の若年層において+反応が多くなるという傾向がみられる。

なお現在グループやサークルに参加していなくてもかつて過去に参加経験のあるものは+反応が多くなる。さらに5項目のうち+反応を3つ以上示したものをA群、+反応が2つ以下のものをB群として再び各項目に対する反応をしらべたところ、A群の方がB群よりも+反応を示す割合は高く項目2, 3, 4, 5において有意な差がみられた。

3

諸個人は、それぞれ固有の生活様式をもっている。時と場合によって違った反応を示すとしてもその違いには「その人らしさ」がみられるものである。これは諸個人が環境に適応していくとき、どのような目標をめざして何に重点をおくかというパーソナリティのメカニズムがはたらくからである。これは一貫性を維持しようとするセルフの機能 self-consistency と密接に関連している。A, アドラーは、このようなセルフによって統合された一貫性あるパーソナリティの様態をライフ・スタイル（元の用語は style of life）と呼んだ⁵⁾。ライフ・スタイルは危機的な状態や不適応において顕在化するといわれるが、日常生活においてもある刺激を与えることによってつかむことができる。

調査A, Bにおいて「あなたの生き方は、次のうちどれを重くみますか」という設問を試みたが、その結果は表6のとおりである。

自他の関係、または自己（エゴ）と社会との関係を2つの極として考えた場合、(I)自己中心 ego-centered と(II)他者本位 alter-c entered または社会本位という2つのライフ・スタイルに分れるが、前者はさらに(I)利己的な自己本位 self-interested と(III)必ずしも利己主義とはいえない自己の成長と充実 self-growth をめざす方向に分れる。自己本位(I)社会本位(III)および自己成長

表5 集団参加態度（+反応のみ）と関連要因

		項目 1	項目 5
性別	男	155 (47.4)	200 (61.5)
	女	81 (35.2)	118 (51.3)
年令	～20才	59 (49.6)	76 (64.4)
	21～25	84 (36.8)	139 (61.0)
	26～30	59 (42.4)	76 (54.7)
	31才～	34 (47.9)	27 (38.6)
職種	公務員	17 (35.4)	30 (62.5)
	会社員	91 (40.3)	125 (55.5)
	自営業	33 (45.2)	44 (60.3)
	学 生	53 (58.2)	58 (64.4)
最終学校	中 学	21 (40.4)	38 (74.5)
	高 校	90 (39.5)	112 (49.1)
	高 専	12 (40.0)	17 (56.7)
	短 大	19 (31.1)	33 (54.1)
	大 学	37 (40.2)	54 (58.7)

表6 ライフ・スタイルの類型

	調査 A	調査 B
I. 自分のたのしみを求めること	62 (20.7)	178 (21.4)
II. 社会のためにつくすこと	9 (3.0)	64 (7.7)
III. 自分がよりよく成長すること	215 (71.7)	502 (60.5)
分らない・不明	14 (4.7)	47 (5.7)
計	300 100.1	830 100.0

京 都 大 学 教 育 学 部 紀 要 XXVI

表7 集団活動の内容とライフ・スタイル

	学習活動	ボランティア活動	スポーツ活動	野外活動	文 化 ・ 術	仲 づ ぐ 間 り	お け い こ と	政 治 ・ 教	あ そ び ・ こ ら く
I. 自己本位	6 (12.8)	3 (10.7)	33 (28.2)	5 (7.9)	8 (13.8)	11 (24.4)	7 (18.4)	2 (10.5)	7 (38.9)
II. 社会本位	8 (17.0)	7 (25.0)	6 (5.1)	5 (7.9)	3 (5.2)	4 (8.9)	0 (0.0)	6 (31.6)	1 (5.6)
III. 自己成長	30 (63.8)	17 (60.7)	73 (62.4)	51 (81.0)	46 (79.3)	26 (57.8)	31 (81.6)	10 (52.6)	10 (55.6)
DK・NA	3 (6.4)	1 (3.6)	5 (4.3)	2 (3.2)	1 (1.7)	4 (8.9)	0 (0.0)	1 (5.3)	0 (0.0)
計	47 (100.0)	28 (100.0)	117 (100.0)	63 (100.0)	58 (100.0)	45 (100.0)	38 (100.0)	19 (100.0)	18 (100.0)

Ⅳという3つのライフ・スタイルのうち、Ⅲがもっとも高い比率で選ばれ、次いでⅠ、Ⅱの順であった。調査 A でも B でも順位には違いはなかった。ただⅡは調査 B において数は少なかったものの比率として調査 A の2倍であったことは興味深い。これは表7から分るように調査 B のなかにはボランティア活動にたずさわっているサークルが多かったことによるものと思われる。学習活動、地域での奉仕活動をしている集団のメンバーにもⅡのスタイルが多い。

年齢との関連をみると年齢が高くなるほどⅡのスタイルが多くなるが、増加率はそれほど顕著ではなく、それよりもⅢの自己成長を求める割合が一貫して多くなっている。これに反して「自分のたのしみを求める」という自己本位型は、年齢が低くなるにつれて増加する傾向にある（表8）。性別とライフ・スタイルの関係は表9のとおりである。

集団への参加者と非参加者でライフ・スタイルの違いはあまり見られなかったが、全体的な集団参加態度との関係では表10のような結果が得られた。すでに表1で示した5つの項目それぞれに対する－反応、＋反応を組み合わせた39のパターンのうちから主なものとして6つのパターンを取り出したのが表10である。

パターンⅠ（浮動型）は、すべての項目に関して－反応をとり、拘束、義務、役割分担、などを否定し、任意的、浮動的な参加形態を是とするものである。このパターンは、自己本位のライフ・スタイルを選ぶものが多い。パターンⅡ（服従型）はリーダーの必要性についてのみ＋反応であるが、これもリーダー依存的な服従的反応であると考えれば、パターンⅠと同類であると見

表8 年齢とライフ・スタイル

	20才以下	21～25才	26～30才	31才以上
I 自己本位	51 (26.6)	68 (23.5)	40 (19.7)	19 (17.8)
II 社会本位	13 (6.8)	21 (7.3)	15 (7.4)	15 (14.0)
III 自己成長	110 (57.3)	189 (65.4)	136 (67.0)	67 (62.6)
DK・NA	18 (9.4)	11 (3.8)	12 (5.9)	6 (5.6)
計	192(100.1)	289(100.0)	203(100.0)	107(100.0)

$d.f.=3 \quad \chi^2=4.3564 \quad Pr.=0.30\sim0.20$
(但し、表8、9ともⅡの欄を省く)

表9 性別とライフ・スタイル

	男	女
I	114 (22.3)	64 (20.1)
II	46 (9.0)	18 (5.7)
III	289 (56.4)	213 (67.0)
DK・NA	63 (12.3)	23 (7.2)
計	512(100.0)	318(100.0)

$d.f.=1 \quad \chi^2=2.2819 \quad Pr.=0.10\sim0.05$

柴野：集団参加とライフ・スタイル

表10 集団参加態度とライフ・スタイル

パターン	集団参加態度					ライフ・スタイル			
	1	2	3	4	5	自己本位	社会本位	自己成長	計
I	-	-	-	-	-	18 (58.1) 17.3	1 (3.2) 2.3	12 (38.7) 3.5	31(100.0)
II	-	-	-	+	-	14 (58.3) 13.5	0 (0.0) 0	10 (41.7) 2.9	24(100.0)
III	-	+	+	+	-	30 (21.0) 28.8	9 (6.3) 20.5	104 (72.7) 30.6	143(100.0)
IV	-	+	+	+	+	18 (16.1) 17.3	6 (5.4) 13.6	88 (78.6) 25.9	112(100.1)
V	+	+	+	+	-	10 (16.4) 9.6	8 (13.1) 18.2	43 (70.5) 12.6	61(100.0)
VI	+	+	+	+	+	14 (12.0) 13.5	20 (17.1) 45.5	83 (70.9) 24.4	117(100.0)
計						104 100.0	44 100.1	340 99.9	

ることができる。ライフ・スタイルの分布は、両者とも非常に似通っている。パターンⅢ（平均型）は、平均的な集団参加の型であり、ライフ・スタイルの分布も全体の傾向にほぼ近い。パターンⅣ（任意型）は、その後のⅤ、Ⅵと同じく積極的な参加態度であるが、項目1についてだけ一反応である。すなわち義務的、拘束的な参加形態よりも任意的な参加形態を選ぶものであり、これはグループに許容的な雰囲気を求める態度であろうと思われる。このライフ・スタイルでは自己成長志向の割合がもっとも高く78.6%である。パターンⅤ（活動型）は、項目5だけが一反応であり、義務的参加、活動目標の明確さ、リーダーの必要性が強調され、活動に応じた役割配分を求めるもので、社会本位のライフ・スタイルがパターンⅥに次いで多い。パターンⅥ（拘束型）は、すべての項目で+反応を示すもので、社会本位のライフ・スタイルがもっとも多く、平均型にくらべて自己成長志向も少ないが、自己本位志向も少ないのが特徴である。

全体的傾向として、一反応が多いほど自己本位志向であり、+反応が増えるほど社会本位志向に傾き、それ以上に自己成長志向が増加するといえることができる。

以上の傾向とすでに表2において示した結果とを結びつけて考えるならば、自己本位を克服して、社会本位または自己成長へと向かう生活態度は、集団活動への参加とその過程におけるさまざまな役割遂行や対人関係を経験することによって促進されるものと思われる。ちなみに集団への参加動機とライフ・スタイルとの関連は表11のとおりであり、趣味や愉しむために参加する場合は自己本位に傾き、教養・仕事・心身の鍛練に重きをおくものは自己成長に傾くといえることが分る。

ライフ・スタイルと関連して、青年たちが自分の青年期をどのようなものでありたいと考えているかを尋ねた結果は表12のとおりである（調査Aにおいてのみ行ったので回答者数は少なくなっている）。全体として「若さ」を主張するものが多く、青年期を「修練の時代」とするもの

京都大学教育学部紀要 XXVI

表11 集団への参加動機とライフ・スタイル

	自己本位	社会本位	自己成長
I { 1 友だちを求める, 異性との交際	6 (13.0)	1 (11.1)	34 (21.3)
2 趣味を生かす, 愉しむため	18 (39.1)	2 (22.2)	43 (26.9)
II { 3 教養を高める, 仕事に役立つ, 心身の鍛練	14 (30.4)	3 (33.3)	74 (46.3)
4 社会のために役立ちたい	1 (2.2)	2 (22.2)	7 (4.4)
III・5 ひまだから	7 (15.2)	1 (11.1)	2 (1.2)
計	46 (99.9)	9 (99.9)	160(100.1)

$d.f.=1$ $\chi^2=2.0975$ $Pr.=0.20\sim 0.10$ (但し, IIIと社会本位を省く)

表12 青年期のあり方

(問) あなたは, 自分の青年期はどのようなものでありたいと思いますか

	参 加	非 参 加	計
I. 立派な社会人となるための修練時代	39 (24.4)	19 (20.4)	58 (22.9)
II. 若さとエネルギーで自分のやりたいことをする時代	102 (63.8)	63 (67.7)	165 (65.2)
III. 社会の矛盾や不正をなくすために行動する時代	7 (4.4)	4 (4.3)	11 (4.3)
わからない, その他, 不明	12 (7.5)	7 (7.5)	19 (7.5)
計	160(100.1)	93 (99.9)	253 (99.9)

$d.f.=1$ $\chi^2=5.1567$ $Pr.=<0.05$ (但し, IIIを省く)

がこれに次ぎ, 社会的矛盾や不正をなくすための「行動」に出るというのは極めて少なかったが, これを集団参加者と非参加者とで比較すると「行動する時代」と考えるものに関しては差はないが, 「修練の時代」と「若さ」に関して両者の間で有意な差がみられた。これによると 集団参加者に目的志向的な態度や社会的責任の観念が強いと言えそうである。ライフ・スタイルとの関連においても青年期についての考え方は有意なかかわりがあり, 「修練」は社会志向型と結びつき, 「若さ」は自己本位もしくは自己成長のどちらかに分化する傾向がみられる (表13)。これは役割猶予期といわれる青年期を何らかの意味での「完成」への準備の時期と考えるか, それとも試行錯誤的に何んでもやってみる冒険と遊びの時期 (E.H.エリクソン) と考えるか, あるいは拘束の免除を最大限に利用することによって社会に奉仕する時期と考えるか等のライフ・スタイルの選択の問題であろう。このようなライフ・スタイルは, かれらが参加する集団のサブ・カルチャーによって形成されるのであるが, ともあれライフ・スタイルの違いは, 日常生活におけるパー

表13 青年期のあり方とライフ・スタイル

	自己本位	社会本位	自己成長
I. 修練の時代	8 (16.3)	5 (62.5)	44 (25.7)
II. 若さの時代	38 (77.6)	3 (37.5)	119 (69.6)
III. 行動の時代	3 (6.1)	0 (0.0)	8 (4.7)
計	49(100.0)	8(100.0)	171(100.0)

$d.f.=2$ $\chi^2=7.9407$ $Pr.<0.05$ (但し, IIIを省く)

スペクティブの違いであり、それぞれは動かすことのできない現実である故にまた相互に了解することの困難な意味世界でもある。A. シュッツがいみじくも指摘したように、われわれの日常生活世界 world of daily life は、実用的な動機や関心によって意味づけられ、囲りの世界と境界によって区画された間主観的意味世界なのである⁶⁾。

そこでグループに属する青少年のライフ・スタイルが他のグループの青少年にとっては全く無縁であったり、相互に無関心になるということが当然起りうる。ここに1つの例がある。本調査に協力してくれたいくつかの青少年グループは、行政当局の設置した青少年ルームで予め日時を予約して会合をもっているが、相互の間での接触、交流は全くなかった。われわれがそれらの代表者を集めて集団面接をしたとき、あるグループの代表から、「同じ場所でもいつも顔を合わせながら、挨拶の一つも交わそうとしないみんなの態度」に対して、批難と自己批判が入り混った発言がなされたことは興味あることと言わねばならない。われわれは、このように多元的現実 multiple reality のなかで生活しているわけで、価値とパースペクティブの多様性を個別的に統合しつつ共有的かつ固有なライフ・スタイルを構成しているのである。

ところでこのようなライフ・スタイルは、信念とか価値・態度体系とかいった確固とした思考・行動のパターンとはやや違う。先の例で青年たちが互いに異なったライフ・スタイルをもつといってもかなりの点で共通したコミュニケーション可能な部分も持っているのである。つまりライフ・スタイルは、日常生活におけるある実用的な動機 pragmatic motive から構成され、その限りにおいて一貫性をもった意味世界であるから、その当事者の実用的動機を理解することによって互いに予解することは可能となる。青年たちが、互いに無関心なふるまいを行うのも、自分を含めて現代のライフ・スタイルの本質を経験的に知っているからだとも言えよう。かれらは互いに他者の実用的動機、生活目標、生きがいの源泉といったものを認め合い、許容する。そしてほんのわずかに自己の認知スタイルを変えることによって他者のそれと重なり合うということもあり得る。つまり、それぞれの青年のセルフは単一の価値や現実にもとづいて構造化されているというよりも多元的な価値や現実との対応において動的に統合されているわけである。

そのようなセルフを多元的セルフ multiple self と呼ぶならば、多元的セルフは、それぞれ境界性をもった独自のスタイルをもつが、実用的動機やパースペクティブの転換によって容易に組み替えることができる。そして多様なグループ・サークルが存在し、多元的な集団参加が行われているという現実自体が、多様なライフ・スタイルの出現を促がすのである。

4

調査 C においては、表14に示されているような10項目の質問を通して、対人的交渉に関連した自己概念をとらえた。これは前出の勤労青少年サークル調査（注1）で用いた自己概念スケールのうち、主として対人関係に関する下位スケールの項目をもとにつくられた。各項目ごとの平均値を示したのがこの表である。これで見るとすべての項目について、否定的反応よりも肯定的反応の方が多く、最も低い平均値でも3.02であった。

全体的な傾向として、対人的交渉に関連した自己概念は肯定的であるが、それでもグループ・サークルへの参加者と非参加者とは差異がある。平均値の差において有意差を示した項目は、6, 8, 10であった。そのうちの一つ、項目8「自分の力を生かしているかどうか」は、肯定的

表14 対人的交渉に関連した自己概念

次の10項目について、あなたが自分じしんについて感じたり、思ったりしているままをお答え下さい。
各項目の右側の5つの答えのうち、どれか一つの個所に○印をつけて下さい。

	全くその とおり	ややその とおり	ど ち ら でもない	あまりそう ではない	全くそう ではない	平均値
	5	4	3	2	1	
1. 人とつき合うのは楽しい						4.35
2. 気持の上で人ととけ合うことができる						3.84
3. ひとを頼りにできる						3.68
4. 人から好かれることは大切な事である						4.61
5. 人にさそわれるより自分の考えで行動 する方だ						3.42
6. 生活が充実している						3.12
7. 自分が好きだ						3.22
8. 自分の力を生かしている						3.02
9. たいいていゆっくりくつろげる						3.04
10. 会やグループのために働くのがたのし みである						3.27

表15 自己実現と集団参加

	人 数 (N)	平 均 値 (M)	標準偏差 (SD)	有意水準 (S)
参 加 者	172	3.2733	0.937	} 0.001
非 参 加 者	113	2.9027	0.954	

反応のもっとも少ない項目であったが、参加者と非参加者との間では有意な差を示しているのである(表15)。このことは、集団参加が自己実現を促進するというだけでなく、自己実現のたしかさを確める基盤ないし枠組として機能していることを暗に示しているように思われる。「グループのために働くのが好きだ」(項目10, $s=0.000$) というのは、本来このような集団親和的傾向をもったものが集団に参加しやすいとも考えられるが、それによって「生活が充実している」(項目6, $s=0.002$) というメリットが生み出されていることも事実である。

集団参加のほか参加グループの数、参加期間、性別、年齢、およびパーソナリティ変容と自己概念の望ましさととの関連を示したのが表16である。(表の数字は、それぞれの要因に関して有意差ありと認められたもので、F 検定または T 検定によって算出された有意水準 significance を示す数字は、危険率 $Pr.$ と同じものと考えてよい)。これによると、参加グループの数は多い方が、また参加期間は長い方が、対人関係を愉しいものとして受けとる傾向があり、他者と融合し、自己の力をたしかなものと考えようである。(ここで参加グループ数「なし」というのは「不参加」を意味するから、グループ数2個以上のものと不参加者とは過半数の項目で自己概念の望ましさに関して有意な差のあることが分る)。また女性よりも男性の方が、行動における主導性、自己受容、集団奉仕の傾向があり、20才以下よりも23～25才の年齢層において自己受容と自己実現の傾向があることも分る。

表16 自己概念の望ましさとその関連要因（有意水準 S の値を示す）

	参加＞不参加	グループの数		参加期間 5年以上＞ 1年以内	性 別 男＞女	年 令 23～25＜ 20才以下	自己変化 変った＜ 変らない
		2個＞なし	2個＞1個				
1. 人につき合う			0.029				0.045
2. 人ととけ合う		0.013		0.048			
3. 人を頼りにできる		0.013					0.035
4. 人から好かれる					0.003		
5. 自分の考えで							
6. 生活が充実	0.002	0.006	0.030				0.017
7. 自分が好き		0.031			0.021	0.013	
8. 自分の力を生かす	0.001	0.002	0.002	0.002		0.021	0.003
9. くつろげる							
10. グループのため	0.000	0.000		0.002	0.007		0.000

集団参加によって自分自身が変わったかどうかという質問に対する反応は表17のとおりであるが、全体としては、「変った」とするものが47.5%であり、「変らない」は22.2%にすぎない。これを集団への参加期間の長さに関連させてみると1年以内と5年以上とは有意な差がみられた ($\chi^2=8.5707$, $s=0.0138$)。そして自己変容と自己概念の望ましさと、項目1, 4, 6, 8, および10に関して関連がみられたのである (表16)。

表17 集団参加と自己変容

かなり変った	56 (19.7)	} (47.5)
やや 〃	82 (27.8)	
あまり変らない	29 (9.8)	} (22.2)
ほとんど 〃	8 (2.7)	
なんともいえぬ	29 (9.8)	
不 明	89 (30.2)	
計	295 (100.0)	

ところでここでいう対人的交渉とは、実態としてはインターパーソナル・コミュニケーションであるが、これを象徴的相互作用論の観点からとらえ直した概念である。人間の相互作用は、ただ単に刺激に対する反応を相互にやりとりするだけでなく、E・ゴッフマンや E・A・ウェインスタインが言うように自己表示 self- presentation と他者規定（または他者陶冶）alter-casting を媒介とした同調と葛藤、誘引と反撥の過程である。したがって対人関係は、“communication” というよりも “negotiation” すなわち「交渉」と呼んだ方がよい。対人的交渉は、単なる意味を媒介にしたコミュニケーションではなく、他者の状況定義に影響を与えるような自己表示、言いかえれば他者操作を含むような意味付与を媒介とした取り引きである。

このような対人交渉を主導的に展開し、自己実現をはかるとともにその中で自己を望ましいものとして認知することができるようなセルフの能力を「交渉性」 sociability と呼ぶのである。交渉性は、社会化によって形成される社会性 sociality と区別されるもので、自己を社会化する能力である。筆者はかつて、「対人的交渉能力、すなわち交渉性は、自己の環境的世界に対する主観的意味づけとの関連において、当該状況にふさわしい反応様式を選択し、適切な人間関係を促進する能力 interpersonal competence である」と述べた。そして、この交渉性は、集団参加によってより促進されると考えられるのである。

5

本稿でいう集団とは、青少年のグループ・サークルであるが、これまでのところでは、その種類や内容についてはふれなかった。表18は、調査対象としてとり上げられた集団の種類である。調査 A と B で参加集団の種類がかなり違っているのは、調査対象の性格の違いによるものと思われる。すでに注4で述べたように、調査 B は京都市の青年の家、社会教育講座などの参加者を主たる対象としている（Y M C A などの青少年組織も含まれている）ので職場内のグループというのが比較的少ないが、調査 A は、青年の家などのほかに大手企業である M 社の従業員が約半数ほど含まれているので、職場内のグループが非常に多くなっている。（調査 C は、調査 A と類似している）。ちなみにこの M 社では、「新はたちの会」というのが企業の労務管理の一貫として組織され、新しく20才になる青年従業員のグループを事業所ごとにつくり、年間計画を作成して多様な活動を行っている。したがってこのような職場によって用意された集団活動を通しての仲間づくりや余暇利用が広く日常生活をカバーしている場合がとくに勤労青少年の場合は多い。そこで質問では、なるべくこのような制度化された組織体から離れてボランタリーにつくられた集団をとり出すために、次のような限定を附して回答を求めた。

「これは、グループ・サークルまたは団体への参加が、われわれの行動にどのような影響を及ぼすかを調べようとするものです。ここでグループ・サークルとは、余暇にメンバーの意見や要求にしたがって自発的に活動し、継続して参加する集団のことを言います」。

本調査の関心は、制度化された集団や大規模な組織体にあるのではなく、自発的に結成された小集団がパーソナリティ変化やライフ・スタイルに対してどのような影響を及ぼすかという点にあ

表18 参加集団の種類

	調 査 A	調 査 B
1. 職場内のグループ（内訳は下表）	120 (67.8)	93 (18.8)
2. 学校、大学内グループ	4 (2.3)	34 (6.9)
3. 住んでいる地域内グループ	19 (10.7)	39 (7.9)
4. 青年の家、勤労青少年ホーム内グループ	3 (1.7)	104 (21.0)
5. その他行政機関のつくったもの	1 (0.6)	7 (1.4)
6. 民間の団体やグループ(YMCA, 新聞社など)	4 (2.3)	101 (20.4)
7. 宗教、政治団体	9 (5.1)	23 (4.6)
8. これ以外の趣味や関心を同じくするグループ	13 (7.3)	90 (18.1)
9. その他・不明	4 (2.3)	5 (1.0)
計	177(100.1)	496(100.1)
職場内のグループ	調 査 A	調 査 B
1) 企業がつくったもの	44 (36.7)	21 (22.6)
2) 労働組合がつくったもの	15 (12.5)	18 (19.4)
3) 自分達がつくったもの	49 (40.8)	49 (52.7)
4) その他・不明	12 (10.0)	5 (5.3)
計	120(100.0)	93(100.0)

る。したがって、前者のような集団類型への参加は除去される方が望ましいのであるが、上記の質問の意図がわれわれの期待どおりに調査対象者に解釈されたかどうか、確信はない。だが企業や大規模組織によってつくられた集団であっても、その活動の中味に自発性があり、メンバーの要求にもとづいた活動が展開されている場合に、青少年はそれをボランティア・グループとして解釈する場合もあり得る。ただ企業や職場内のグループであっても表18から分るように、必ずしも企業サイドでつくられたものばかりでなく、自分たちが自発的につくったグループ・サークルが40～50%を占めているのである。

集団参加のきっかけは、「自分からすすんで参加」したものが53.6%（調査 B）であり（調査 A では47.5%）、ついで「人にさそわれて」がそれぞれ26.8%, 24.4%である。参加動機は、趣味を生かしたり、愉しむためという趣味志向がもっとも多くて40.2%, 次いで教養を高める、仕事に役立つ、心身を鍛えるためという自己向上志向が23.8%, 仲間づくりや異性との交際という仲間志向は22.1%であり、これら三つで86.1%となっている。そして社会のために役立ちたい（5.0%）ひまだから（3.8%）というのは、いずれも僅少である。

集団で主としてやっている活動を頻度の多い順に並べてみると、スポーツ活動（25.9%）、学習・文化活動（23.3%）、野外活動（14.0%）、仲間づくり・親睦（10.0%）、おけいごと（8.4%）、ボランティア・地域奉仕活動（7.8%）、政治・宗教活動（4.2%）、あそび・娯楽（4.0%）、労働運動（2.4%）であり（いずれも調査 B）、全体として集団参加の動機からも予測されることであるが、表出的 expressiveな関心を満たす方向での活動が多い。これはグループ・サークル活動が余暇活動であるということから来る必然的な帰結でもあるが、活動の形態は表出的であってもそこから生れる各成員のパーソナリティおよび集団それ自体に対する出力 output としては、自己向上、学習、社会奉仕などといった何らかの資質形成や社会的インパクトの創出をもたらすものと思われる。

だが表出的な形態の集団参加が、消費的な遊び志向に終始するか、それとも望ましい人格的資質の形成や社会参加といった生産的志向へと発展するか、いずれに向かうかの判断は難しい。これはグループ・サークル活動の評価とも関連するが、実態をふまえて判断しなければならない。結論から先に言うなら、青少年のグループ・サークル活動は、いずれの可能性をも併せてもっているということになるが、問題は如何なる条件においてグループ・サークル活動は生産志向的になるかということである。

かって勤労青少年の福祉対策が叫ばれたとき、「独りぼっちよ、さようなら」というのが合言葉であった。たしかに集団参加は、仲間づくりを促進し、他者のパースペクティブをふまえた役割取得を進展させる。気心の分った仲間や友人が多くいるということは、パーソナリティを開放的にし、ありのままの自己表出を促がすのに役立つ。それは自己変容の最初の契機となる（表16参照）。気楽につき合える友だちを何人くらいもっているかを尋ねた結果は、表19のとおりで、集団参加者の方が非参加者よりも友

表19 「親しく気楽につき合える友だちや知人」の数と集団参加

	参加者	非参加者
1～3(人)	41 (25.6)	23 (24.7)
4～5	35 (21.9)	36 (38.7)
6～10	31 (19.4)	19 (20.4)
10人以上～	51 (31.9)	13 (14.0)
なし・不明	2 (1.3)	2 (2.1)
計	160(100.0)	93 (99.9)

$d.f.=3$ $\chi^2=13.4661$ $Pr.<0.01$ (調査A)

京 都 大 学 教 育 学 部 紀 要 XXVI

表20 年 令 と 集 団 参 加

	20才以下	21～25才	26～30才	31才以上
参 加	108 (53.5)	192 (63.2)	134 (63.5)	62 (54.9)
不 参 加	94 (46.5)	111 (36.5)	77 (36.5)	50 (44.2)
不 明	0 (0.0)	1 (0.3)	0 (0.0)	1 (0.9)
計	202(100.0)	304(100.0)	211(100.0)	113(100.0)

$d.f.=3$ $\chi^2=7.1034$ $Pr.=0.10\sim0.05$

(調査B)

人の数は多かった。

集団参加と年齢との関係を見ると、年齢層によって参加の度合いが異なることが分る (表20)。集団参加率は、31才以上でやや落ちるが、年齢が高くなるほど高くなる傾向にあり、20才以下の層でもっとも低い。これは若年層がまだ社会的経験の広がりや社会的接触の範囲が狭少であることに由来するものと思われるが、それだけでなく勤労青少年の場合は「時間的余裕がない」「ゆとりがない」、または「きっかけがない」「希望するグループがない」等の理由を挙げるものも多く、集団参加を促進する条件に恵まれていないことが分る。男性と女性とでは集団参加に関してほとんど差がない。

6

われわれの調査では、全体として集団参加率は非常に高く、総理府の全国調査を大きく上廻っている。これは、青年の家などの青少年施設での青少年グループを対象として含んでいるからである (表21)。だがこれらの被調査者は、必ずしもグループ・サークル活動が活発に行われているとは思っていない。調査Cで「最近、「自発的に何かをやる」というグループやサークルが少なくなった、低調になったといわれますが、あなたはどう思われますか」と尋ねたところ、これを否定するものも33.6%あったが、肯定するものが27.1%あったことは注目すべきであろう。

「分らない」という答えが37.6% (不明1.7%) もあったので、速断は出来ないが、「低調である」とする理由として、青年自身が自分たちに主体性が欠けている、無気力である、誰かがやってくれるだろうと考えて、みずから進んで役割を引きうける者がなくなった、協調性に欠ける、集団でやるより個人レベルで愉しもうとする、安易に流れる傾向などを指摘しているのは重大である。

このような集団活動の低調さは、先に述べたライフ・スタイルのあり方と深い関連があるものと思われる。すなわち社会本位の認知スタイルよりも個人本位のスタイルが優位であるという傾向が、集団活動の低調さをもたらすのである。したがって集団活動が低調だということは、二つの意味をもっている。一つは、集団参加に対するネガティブな評価と結びつくもので、レジャー志向、快楽主義、個人主義的、小市民的な安逸への逃避といった消極性のあらわれと見なすものである。たしかに今日のグループ・サークル活動は、自分たちの集団の内部に閉じこもり、外側の社会に眼を向けようとしない集団至上主義的傾向におち入り易い危険性をもっている。社会的

表21 集団参加率の比較

総理府調査 (昭45)	35.2(%)
〃 (昭50)	36.6
本調査 A	53.3
〃 B	59.8
〃 C	60.0

文脈のなかで自分たちの問題を考えようとしないう。綜合サークル的な仲好しムードにひたり、互いに慰め合うだけに終る傾向がないとはいえない。だがこのような孤立的、自己愛的傾向は、グループ間の連合体や協議会をつくることによって克服される。連絡協議会のような組織をもつグループ・サークルは38.6%ある。

もう一つの観点は、集団活動の低調さは、必ずしも上記のようなネガティブな効果をもつものでなく、外見的には低調であっても、そこに却って積極的な可能性が秘められていると見る見方である。この観点に立てば、協調性の欠如や個人本位と見える行動は、自主性のもう1つの顕現形態であり、「多元的現実」を許容する精神そのものであると見ることもできる。それぞれの個人に固有なパースペクティブを認め合う態度は、個性的なライフ・スタイルといえる。だがそこに全く共有性がないとしたならば、それはアナーキズムにおち入るわけである。グループ・サークルという自発的な任意集団 voluntary association の効用は、共有的な認知スタイルないし間主観的、シンボリックな小世界を創出し、諸個人の主体的な自己形成にとっての準拠枠をつくりだすことにある。E・ゴッフマン流に言うならば、集団活動が「儀礼」ritual をつくりだすかどうかという問題であろう¹⁰⁾。「儀礼」は象徴的な意味合いを擁護するとともに新たにそれをデザインする機能をもつ。また集団が共有的な「儀礼」をもつことによって、諸個人は主観的に意味であり、かつ自己呈示としての行為、すなわちパフォーマンス¹¹⁾を貫徹することができる。パフォーマンスは、機械的な反応としての行動ではなく、ある一貫性をもって過去、現在、未来を統合することができるような自律的なセルフの行為である。

本稿を結ぶに当たって少々不本意な点は、今日の青少年集団に対する明確な判断規準を示すことができないことである。だが逆に言えば、今日の青少年集団はそれだけ多様性をもち、変異性に富んでいるということであり、同時に消極面と積極面、否定的、肯定的側面の両方をもっているということでもある。それ故に、もし青少年の自発的な任意集団が、上に述べたような「儀礼」を創出するならば、パフォーマンスの性能をもったライフ・スタイルが形成され、その集団参加はポジティブな効果を生み出すであろうと考えるのである。

註

- 1) 拙稿「集団参加と人格成長」～勤労青少年のサークル活動調査から～『教育社会学研究』第29集、1974年、135～145頁。
- 2) ここで人格成長 personality growth とは、生理学的、心理学的なパーソナリティ発達だけにとどまらず、社会性 sociality の発展をふまえて個性 individuality 自律性 autonomy、交遊性 sociability の発展を含めたパーソナリティの成長を意味している。拙稿「社会化論の再検討」～主体性形成過程の考察～『社会学評論』107、1977年、麻生・柴野編『変革期の人間形成』～社会学的アプローチ～、アカデミア出版会、1978年参照。
- 3) たとえば、佐々木斐夫「新しい文化の創造」講座社会学(7)『大衆社会』東京大学出版会、1957年、C・ロジャーズ（島瀬稔訳）『エンカウンター・グループ』ダイヤモンド社、1972年など。
- 4) 本論稿は、A、B、C 三つの調査をふまえて書かれている。それぞれの調査は、昭和51年度の予備調査をふまえて、調査 A は昭和52年度と53年度に京都、大阪の青年の家を利用している青少年、M 社（大規模模写電メーカ）に勤務する青年従業員を対象に行ったものである。調査 B の資料は、昭和53年度に京都市で行なった青少年施設利用と集団参加状況についての調査を利用している。さらに調査 C は昭和53年から54年度にかけて東京、名古屋、大阪の各青少年施設、M 社、京都市青少年指導者講習会などを対象に行ったものである。調査対象者の年齢別、性別内訳は、次表のとおりである。調査 B には成人教室な

	調査 A	調査 B	調査 C		調査 A	調査 B	調査 C
20才以下	76 (25.3)	202 (24.3)	75 (25.4)	男	202 (67.3)	512 (61.7)	161 (54.6)
21～25才	142 (47.3)	304 (36.7)	139 (47.2)	女	98 (32.7)	318 (38.3)	129 (43.7)
26～30才	64 (21.3)	211 (25.4)	64 (21.7)	不明	0 (0)	0 (0)	5 (1.7)
31～35才	18 (6.0)	43 (5.2)	5 (1.7)	計	300(100.0)	830(100.0)	295(100.0)
36才以上	0 (0)	70 (8.4)	4 (1.3)				
不 明	0 (0)	0 (0)	8 (2.7)				
計	300 (99.9)	830(100.0)	295(100.0)				

どの参加者も含まれているので高年齢層がやや多くなっているが、全体として21～30才の青年層が6～7割を占めている（この調査結果は、別に『青少年施設とグループ活動』1979として発表された）。

- 5) Ansbacher, H.L. & R. R. Ansbacher (eds.), *The Individual Psychology of Alfred Adler*, New York, Basic Books, Inc., 1956, ch. 7.
- 6) Schutz, A., "On Multiple Reality", in Gordon, C. & K.J. Gergen (eds.), *The Self in Social Interaction*, John Wiley, 1968, pp. 61-70.
- 7) E. ゴッフマン (石黒 毅訳), 「行為と演技」誠信書房, 1974年, 4 頁, また H. ブルーマーは, 人間が自己自身に対して対象を呈示 self-indication し, 他者に対して意味附与を行なう過程を象徴的相互作用と呼ぶ
Blumer, H., "Society as a Symbolic Interaction", in Rose, A.M. (ed.), *Human Behavior and Social Process*, R.K.P., 1962,
- 8) Weinstein, E.A. & P. Deutschberger, "Some Dimensions of Altercasting", *Sociometry*, 1963, 4, pp. 454-466.
- 9) 「社会化論の再検討」(前出), 社会学評論, 31頁。
- 10) Goffman, E., *Interactional Ritual: Essays on Face-to -Face Behavior*, Allen, 1967, pp.44-57.
- 11) Schutz, A., *op. cit.*, pp.62-63. シュッツは behavior と区別して performance を目的的, 自覚的な行為であるという。

〔付記〕本論文は、文部省科学研究費補助金による一般研究(D)の研究成果をまとめたものである。

(本学部助教授)